

今回は、この時期、南河内の山々で巡り会える野草の中から、幾つかの花を紹介します。

写真 : ゲンノショウコ

命名の由来は、“食べるとたちどころに薬効が現れる”ということで「現の証拠」...
この花は“雄性先熟”の花で“雄花期”と“雌花期”があります。(キキョウと同じ)
西日本では紫紅花が多いようですが、東日本では白花が多いということです。
この写真の花は、“雄花期”から“雌花期”への移行期のように見えます。

写真 : ゲンノショウコ

2つの花が仲良く並んで咲いています。左側の花は花粉を出し終えた雄しべがまだ残っていますが、雌しべの先が開き始めています。
右側の花は、既に雄しべは朽ちて脱落しており、雌しべの先が大きく開いています。

写真 : ゲンノショウコ(白花タイプ)

写真 : ダイコンソウ

命名の由来は、根本付近の葉が大根の葉に似ていることからのようです。
花を見ると雄しべも雌しべもたくさんあるのが分かります。
花びらが散り落ちると、雌しべがどんどん伸びてその先端が“カギ”状に曲がりますが、このカギで動物などの体にひっかかって種子を散布する、という作戦みたいです。

写真 : フシグロセンノウ

ナデシコの仲間で、花茎の節の部分が赤黒くなります(命名の由来)。
山地の林縁部の草地や、沢沿いの湿った場所を好んで生育しています。
薄暗い場所では、鮮やかなオレンジ色の花びらが浮かび上がって見えてきます...

写真 : マネキグサ

花が手招きをしているような形からこの名があるということですが、その花はどうも“レインコートとレインキャップを身につけたカップ君”に見えてくるのですが...
全国的に希少種となりつつあります... (環境省のレッドリストでは「準絶滅危惧種」)

写真 : ヤマジノホトトギス(今が盛り!)

写真 : オトギリソウ

ある鷹匠が、この草から作る秘薬を他人に教えてしまった弟を刃にかけ、そのとき飛び散った血が、この草の黒い斑紋になった... 平安時代から伝えられている伝説です...

写真 : ヌスビトハギ

平地では北米原産の帰化植物「アレチヌスビトハギ」が猛威を振るっており、衣服にびっしりとこびりつく、あの3節からなる“ひっつきむし”には閉口です...
(1940年ころに大阪で見つかり、最近では本州から沖縄までに見られるようになりました...)
一方、この写真は在来種で、主に山間部の草地や林縁部などを生育の場としています。
実の形が盗人の足跡(つま先立ちで忍び足...)に見立てられての命名だそうです。
このように、在来の“ヌズビト”は木陰でひっそりと暮らしているのです。

















